学校評価シート（秋田県立大曲支援学校）

評価領域	進路指導

重点目標	・「つながりプラン」を活用し、学び合いの学習活動を行うことで、早期から勤労観・職業観を育成し、就労意欲の向上につなげる。 ・職場見学・体験及び、職場実習の意義を周知するとともに、企業と連携した職場実習による生徒の進路実現に向けた効果的な計画を立案する。 ・「障害者の生涯学習」の充実に向けた活動の立案に向けて、関係機関との連携し講座への参加促進を図る。	P
現状	・つながりプランは３年目の実施となり、プランは周知されている。事前にねらいを共有することの重要性を周知する必要がある ・経験拡大に向けた複数事業所での実施を計画している。 ・学びの場の機会提供につながる講座開設に向けて、関係機関との連携について検討している。	
具体的な目標	・職業教育の充実に向けた「ねらい共有シート」によるねらいの共有や、進路指導主事講話等を活用する。 ・生徒の特性に合わせてた、複数業種の職場実習を計画する。 ・中学部の職場見学・体験を系統的に実施する。 ・地域での学びの機会を創出するために関係機関への情報提供を行う。	
目標達成のための方策	・交流希望について、進路指導部が仲介役として連絡・調整を図る。また、様式を簡素化した活動記録の作成を依頼し、廊下掲示を行う。 ・一般企業で職場実習を予定している生徒について、得意・不得意、行動特性を考慮した複数業種の職場実習を実施する。福祉サービス利用の生徒については希望に合わせて複数の施設での実習を実施する。 ・働くイメージをもちやすいように、中学部の職場見学・体験を同企業で実施する。 ・同窓生対象の「ふれあいハッピースクール」を開催する際に、大仙市の生涯学習課を招聘し、実施実態や合理的配慮について情報提供する。	
具体的な取組状況	・小・中学部では、作業学習や校内実習の授業参観等、進路に関わる学習計画に、進路指導主事が連携して活動を行った。また、各学部での活動について、生徒の感想を中心とした記録を掲示した。 ・一般企業での職場実習を希望する生徒について、各企業の業務内容や特徴について担任と共通理解し、受け入れ先の選定を行った。 ・大仙市障害福祉課の担当者と連絡調整を行い、ふれあいハッピースクールに招聘した。取組の実態や配慮点、心理面により参加できなくなった場合の対処法について情報提供した。	D
達成状況	・「つながりプラン」について、形式的になりがちな作業学習の体験について、ねらい共有シートへの記入をきっかけとした、担当者間の事前打ち合わせにより、ねらいを共有した活動を展開した。また、廊下掲示による職員への情報提供も行った。昨年度から行	

	っている中・高等部合同作業学習製品販売会も、学び合いの機会として充実している。 ・中学部の進路学習において、進路指導主事が授業を行った。高等部進学や卒業後の姿について、具体的な進路へのイメージをもつことにつながった。 ・中学部１年の職場見学と、２年の職場体験をイオン大曲で実施した。系統的に活動を計画したことで、段階的な職業観の育成につながった。高等部の職場実習においては、勤労観・職業観の育成及び職業現場の経験拡大等の趣旨を地域企業に周知し、生徒の育成に向けた連携をすることができた。 ・青年学級を実施する際に、大仙市の生涯学習課の生涯学習担当者を招き、実施方法の現状や合理的配慮について情報提供を行った。 ・地域の講座開設に向けて、公民館の活用について打診し、絵画講座を実施することができた。		

自　己　評　価	（評価） B	（根拠） ・「つながりプラン」については、シートを作成する手間はあるが、事前にねらいを共有する重要性について広まってきていると感じる。活動記録の簡素化や、教育課程三部会との連携も推進につながった。 ・職場見学・体験及び実習は、地域企業との連携が深まってきており、趣旨が伝わり活動の幅が広がっている。 ・「ふれあいハッピースクール」はこれまでも学校の行事として行われてきているため、関係機関との連携の土台として活用できている。	C

↑
評価基準
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） B	（意見） ・３年目となる「つながりプラン」は、担当者間の事前打合せにより、ねらいを共有する活動への認識が高まった。また、活動に広がりが見られた。 ・職場見学・体験学習及び実習は地域企業との連携も深まり、勤労観・職業観の育成の充実につながっている。 ・障がい者就労の現状等は、生徒に加え保護者にも周知してほしい。 ・より充実した「ふれあいハッピースクール」の実施に向けては、関係機関との連携をさらに深めてほしい。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	・学部を越えた活動の推進のため、進路指導主事を活用した進路学習の実施や、作業学習・校内実習の参観の機会を設ける。また、今年度の活動記録等について、早い段階で職員へ情報提供する。 ・保護者対象の進路説明会等において、引き続き障がい者就労の情報提供を確実に行う。 ・職場実習の実施に関し、生徒の実態把握をより丁寧に行い実習先の選定を行う。 ・障害者の生涯学習の推進に向けて、関係機関との連携した講座開設を目指し、青年学級を活用する。	A

学校評価シート（秋田県立大曲支援学校）

評価領域	研　究

重　点　目　標	・「主体的・対話的で深い学び」の視点での「根拠のある授業づくり」と教育課程の改善 ・教員一人一人の授業力向上	P
現　　状	「意欲的に自分の役割に取り組む力を育てる授業づくり」を研究主題として、各教科等の目標を意識した単元目標を設定し、児童生徒の変容の根拠となる評価規準を用いた学習評価を実施し、各教科等を合わせた指導の学習で検証を行った。	
具体的な目標	意欲的に自分の役割に取り組む力を育てるために、単元目標や学習評価を児童生徒の変容に結び付け、ＰＤＣＡサイクルに基づいた授業づくり、授業実践を通した教育課程の改善	
目標達成のための方策	○公開研究会や全校授業研究会での授業提示と児童生徒の姿を根拠にした研究協議会の実施（研究対象：各教科等を合わせた指導） ○教員一人一授業提示（研究対象：各教科等を合わせた指導、国語／算数・数学、自立活動）と授業改善 ○教育課程検討委員会、教育課程三部会（国語・算数／数学、自立活動、進路学習）の実施	
具体的な取組状況	○「自分の役割に取り組む児童生徒の姿」を引き出すための工夫 ・自立活動の視点による単元構成検討会と学習指導案検討会の実施。（構成メンバー：授業提示者と学部主事、研究部員、教育専門監、研究主任他） ・各学部設定の「授業づくりの視点」の共通理解を図るワークショップ型研究会の実施 ・思考や試行の振り返りを積み重ねた授業提示 ・児童生徒の姿を根拠にした研究協議 ○教育課程検討委員会、教育課程三部会の実施 ・適切な目標設定や観点別評価、児童生徒の変容の見取りと授業評価	D
達　成　状　況	・思考や試行の振り返りを意識した取組の実践では、即時評価やＩＣＴ活用等も取り入れた学習評価や評価規準の具体化による学習活動と手立ての明確化を実施し、ＰＤＣＡサイクルに基づき次の学びへとつなげていくことが有効であった。 ・各検討会の中で自立活動の視点からの実態把握や単元の指導計画における目指す姿から学習活動の見直しなどを整理したことで、授業改善が図られた。 ・公開研究会を実施し、児童生徒の姿を根拠とし「授業づくりの視点」のある授業研究会を行うことで、成果と課題を整理できた。課題とともに成果にも目を向け、なぜできたのかという視点での考察や各教科等を合わせた指導において、より各教科の目標に迫った学習評価の設定をしていく必要がある。	

		・教員一人一授業提示を実施し、授業を録画して自由閲覧し活用できた。	
自　己　評　価	（評価） A	（根拠） ・ＰＤＣＡサイクルに基づいた根拠のある授業づくりの実践では、指導と評価を一体化し、児童生徒の姿を見取り変容を価値付けていくことで、次の学びへ結び付け授業改善を図ることができた。また、公開研究会を実施し、指導助言者からの評価を授業改善、研究の推進へ反映できた。 ・教育課程三部会では各部会・分掌が連携し、課題の共有と教育課程に直結する改善案が出され、協議内容の情報共有・発信を実施している。	C

↑
評価基準
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	（意見） ・学習活動を見直し、評価規準を具体化することで授業改善が図られた。また、公開研究会を実施し、児童生徒の姿を根拠とした「授業づくりの視点」から、成果と課題が明確になった。 ・教育課程三部会では各部会・分掌が連携し、課題の共有と改善案が提示され、協議内容の情報共有・発信がなされた。 ・教員の授業を録画し、自由閲覧できるようにしたことの効果を検証してほしい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策		・引き続き各教科等を合わせた指導における各教科等の目標に準拠した学習評価を設定する。 ・環境を整え過ぎず、自ら考える姿を引き出す発問や意図的に児童生徒が思考する場を設定する。 ・課題とともに成果にも目を向け、「なぜ、できたのか」という視点での考察を行う。 ・今後も、教育課程三部会において各部会・分掌との課題の共有や教育課程に直結する改善案の協議を行い、研究の充実を図る。 ・録画授業の活用は多面的に検証し、より効果的な活用につなげる。	A